

CASE 04 | 難聴の通級による指導での事例

【環境の把握×遠隔システム】

「他校の同じ障害のある人と友だちになりたい」



リモートで教員に
近況の報告をして
いる。

○子どもの願い

- ・同じ障害を持つ子どもと、情報を交換したり悩みを相談したりできる機会が欲しい。

○対象の子どもの実態

- ・子どもたちは、両耳人工内耳、両耳補聴器、片耳補聴器片耳人工内耳を使用している。
- ・聴覚特別支援学校での早期教育を受けたのち、地域の小学校の通常学級や難聴学級に在籍し、中学校から通級指導教室を利用している。
- ・口話でのコミュニケーションが可能である。
- ・考査時の英語のリスニングは、別室で実施している。
- ・国語や音楽の聞き取りテストでは配慮が必要である。
- ・授業時には、補聴援助システムを使用している。

○指導する自立活動の区分・項目

- | | |
|--------------|---|
| 区分:人間関係の形成 | 項目:他者とのかかわりの基礎に関すること。
他者の意図や感情の理解に関すること。
自己の理解と行動の調整に関すること。
集団への参加の基礎に関すること。 |
| 区分:環境の把握 | 項目:保有する感覚の活用に関すること。
項目:感覚の補助及び代行手段の活用に関すること。 |
| 区分:コミュニケーション | 項目:コミュニケーションの基礎的能力に関すること。
項目:コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。
項目:状況に応じたコミュニケーションに関すること。 |

○目標

- ・リモートに参加する上で自分に必要な支援方法について体験を通して知る。
- ・自分に必要な支援を周囲に求めることができる。
- ・同じ障害を持つ仲間とオンラインで交流を図る。

○指導内容

- ・本校と在籍校との間で遠隔システムの接続確認を行う。
- ・事前に、リモート参加する際の不安や自分でできる対策について考える機会をもつ。
- ・交流で使用する自己紹介のスライドを作成する。
- ・教員とのリモート後、自分に必要な支援について考え直す機会をもつ。
- ・難聴の通級生同士で人数を段階的に増やし、リモートでの交流を実施する。
- ・振り返りを行う。

○使用 ICT 機器：パソコン(本校:指導者) タブレット(通級を受ける生徒)



- ・対面での通級による指導と指導の間にリモートを実施した。
- ・掃除の時間など短い時間を活用して実施した。



○取り組む上で工夫したことや困ったこと

- ・リモートの際、自分に必要な支援についてどんな工夫できるかを子ども同士で話し合い、考える時間を設けた。
- ・交流では、「自己紹介」「私の学校」「住んでいる市」「私の宝物」という内容についてスライドを作成し、視覚的な情報を活用して相手に伝えるようにした。
- ・対面での指導場面で教員と一緒にタブレットの操作方法について取り組むことでタブレットの操作への不安を取り除いた。
- ・リモートの事前事後指導を丁寧に行うことにより、リモートに意欲的・積極的に取り組めるように配慮した。
- ・リモートにおいて音声を字幕に変換して提示することができた。
- ・子どもが在籍校のタブレットを使用することや、接続の不具合時への対応も含め、在籍校との円滑な連携体制を整えることが重要だった。
- ・本校の接続の不具合や技量不足もあり、スムーズにつながらないことがあった。

○【成果】子ども・教員等の変化

(子ども)

- ・字幕やロジャーの使用により、内容が理解できることが分かり、在籍校で実施されたりリモート学活にも不安なく参加することができた。
- ・写真を検索したり、プレゼンテーションソフトの機能を活用したりして、相手に伝わりやすい自己紹介シートを作成することができ、自分のことをよりよく知ってもらうことができた。
- ・交流を通して、他校の環境や趣味を知り、他の通級生に興味を持ち、会話を深めることができ、リモートでの次の交流が待ち遠しく思うようになった。

(教員)

- ・リモートのたびに通級生の感想を丁寧に聞き取った。これにより、難聴の通級生が不安に感じていることを把握し、対応することができた。
- ・機器を介した聞き取りに関しては、装用する補聴機器や通級生の考え方の違いも明らかになった。
- ・リモートでの回数を重ねる中で課題も出てきたがその都度、周りの教員と連携し、進めてきた。

○今後、自立活動に ICT 機器を活用する教員へのメッセージ

自立活動を担当する教員すべてが ICT に関する知識や技能に卓越しているわけではなく、試行錯誤を重ねた日々だった。「こんなことがしてみたい」「あんなことができたらいいな」という願いを持ち、口にするだけで、少しずつ願う形に近づいていくことができるのだと思う。

自分一人では難しいことでも、相談していくうちに協力者も増え、新しい関係が生まれたりもする。味方が増えると、見方が増える。子どもたちが生き生きと社会参加していく姿を思い描きながら一緒に ICT 機器に親しんでいく中で、子どもたちが意欲的・積極的にオンライン学習に取り組めるようになればいいなと考えている。